

H-I ロケットの開発に関する宇宙開発委員会
第二部会第一次報告書について

昭和55年7月15日
科学技術庁

I 審議経過

宇宙開発委員会は、昭和53年8月、第二部会（部会長：吉誠雅夫 現在、鷗津久一郎）に対し、昭和55年度から使用されるH-II ロケット（静止衛星打上げ能力350kg）に引き続き、昭和60年頃から10年以上我が国の主力機種として使用する必要があるH-I ロケットの開発について審議付託を行った。同部会は、H-I ロケット分科会（分科会長：山内正男 現在、武田駿）を設置し、昭和60年代において打上げが予想される人工衛星の重量等の見直し、H-I ロケットの考えるコンフィギュレーション案の比較検討、最適開発ステップなどについて調査審議を進めてきたが、このたび第一次報告書としてとりまとめ、宇宙開発委員会に7月2日報告し了承された。

II 報告書の概要

1 開発の前提条件

H-I ロケットは、

- ① 昭和60年代における我が国の人工衛星の打上げ要望にこたえるものであり、

- ② また、N-I, N-II ロケットの開発により蓄積された技術を活用するとともに、今後の我が国の宇宙輸送系に必要な液体酸素・液体水素推進系、慣性誘導系などの技術を自主開発するものとする。

2 開発の進め方

- (1) 我が国における人工衛星の打上げ要望は、昭和60年代前半は静止衛星重量換算で500kg級、昭和60年代後半は800kg級となつてゐるため、H-I ロケットの開発は、前段階（500kg級）と後段階（800kg級）とに分けて進めることが適当である。

このように、人工衛星の打上げ要望に対応しつつ段階的に打上げ能力を増強していく方法は、資金的、人的及び技術的に着実な進展を図るものであり、最適な開発の進め方であると考えられる。

- (2) 前段階については、昭和56年度から約550kgの静止衛星の打上げ能力を有するロケットの開発に着手することが適当である。

また、後段階については、ユーザーの要望、スペースシャトル、アリアン等の運航状況、技術的・経済的フィジビリティなどを勘案するとともに、我が国の将来の宇宙輸送系との関連を考慮して開発計画を検討する必要がある。